信楽の陶芸家描く映画完成

火火（ひび）

「火火」応援特集号

2004年(平成16年)
12月

発行所
みんなで作る新聞社
〒520-8986
大津市におの浜4-7-5
電話 077(523)6417
FAX 077(522)6955

2005年4月いよいよ創刊

みんなの滋賀新聞

■「火火」応援特集号：1面／信楽舞台の映画完成　2面／購読予約者「映画ペアチケット」プレゼント

「火火」で主人公の神山清子さん役を演じる田中裕子さん

甲賀市信楽町の女性陶芸家、神山清子さんを題材にした映画「火火（ひび）」は、いよいよ1月22日から県内をはじめ全国で公開される。信楽自然釉（ゆう）の成功を目指し陶芸に打ち込む姿や、白血病で倒れた長男賢一さんを救おうと独特の愛情表現で接しながら、一緒になって病と闘う半生を描いた感動作。神山さん宅をはじめ甲賀市で大半のロケを行い、本県と縁が深い。監督・脚本は高橋伴明さん、主演は田中裕子さん、賢一さん役に窪塚俊介さん。県内で公開するのは浜大津アーカスシネマ（大津市）、草津シネマハウス（草津市）、彦根ビバシティシネマ（彦根市）、水口アレックスシネマ（甲賀市）、ワーナー・マイカル・シネマズ近江八幡（近江八幡市）の5映画館。1月11日には本県で初めて、5館で同時試写会がある。

信楽が舞台　11日に5館同時試写会

映画「火火」1月22日から上映

浜大津アーカスシネマ　水口アレックスシネマ　草津シネマハウス　ワーナー・マイカル・シネマズ近江八幡　彦根ビバシティシネマ

火火

物語は信楽を舞台に展開される。神山清子は夫と別れ、娘と息子を育てながら焼き物の道を歩んでいた。彼女は釉薬（うわぐすり）を使わずビードロの光を出す古来の信楽焼の復活を目指す。女の窯は認められないと寄り合いで告げられながら執念を燃やし続ける。

撮影用のセットではなく実際の清子の穴窯を使い、その前で田中裕子演じる清子が次々と薪（まき）を火の中に放り込む。

カメラも窯の中で燃え盛る炎と、火に巻かれて白く光る焼き物を執拗に追う。やがて幾度もの失敗を経て、清子は求める光にたどり着くが、ひたすら火をたき続ける清子の姿に映画を貫く生への賛歌があふれる。

後半では、母と共に陶芸の道を歩み始めた息子の賢一が、白血病に倒れるまでが描かれる。病を告知され、死におびえながらも賢一は真っすぐに生き抜こうとする。親子とそれを取り巻く人々は敢然と病魔に立ち向かうが壁はあまりに厚い。公的骨髄バンクもまだなく、懸命の努力にも病の進行は止められない。その先頭を清子は気丈に駆け抜ける。闘病にもがき苦しむ賢一とともに鮮烈な炎となって命を燃やす。

やがて死が賢一を襲う。血を吐いて「怖い」とつぶやく賢一に清子は「しっかりしろ」と叫ぶ。清子は息子を抱きしめ静かに「島原の子守唄」を歌い始める。

映画は信楽を中心に県内各地で撮影された。湖国の美しさも見逃せない。

高橋伴明監督、本社訪れ抱負

滋賀の方の協力に感謝

映画に向けて神山さんと信楽を取材して行くうちに、私の中で亡き母のイメージと神山さんが重なるようになりました。母は私が高校1年生の時に父を失い、女手一つで2人の子どもを育てた。激しい女でした。その母のことは今にして理解できる。それだけに母と子のぶつかりは特に思いを込めて描きましたね。

滋賀の方たちは、ここまでというほど協力して下さいました。深く感謝しています。

（昨年11月、みんなで作る新聞社で語る）

みんなで作る新聞社を訪れ思いを語る高橋伴明監督

「火火」主人公　神山　清子さん

（こうやま・きよこ）

1936年、長崎県佐世保市生まれ。戦後、信楽に移り住み、18歳より陶器絵付けを学ぶ。21歳で結婚。長女・久美子、長男・賢一を産む。27歳より絵付けから転進して作陶に入り、30歳で県展などに入選。34歳で独自の穴窯による信楽焼古来の作陶に挑む。求める光沢のため5年の歳月を費やし全国の百貨店などで個展を成功。その後、韓国・米国・スペインなどにも展開。陶芸家としての地位を確立する。信楽窯業試験場を卒業した息子の発病は1988年、52歳（賢一27歳）の時。「神山賢一を救う会」を結成して骨髄ドナー探しに走る。

さらに賢一が会長の「骨髄バンクと患者を結ぶ会」で運動を全国に広げるが56歳で賢一を失う。その後も「滋賀骨髄献血を広げる会」を発足させ、白血病患者や家族を励ましし続けている。

映画の撮影では自宅や窯を全面的に提供。作中の陶器数百点を自ら焼いた。出演者に陶芸も指導した。